

鎌倉における地域サテライトラボの発足

環境情報学部 教授 田中浩也 たなかひろや

歴史文化で有名な鎌倉市は、近年リサイクルに注力する中都市としても知られるようになってきた。過去30年で約6割ごみを減らしてきた実績があり、現在はリサイクル率が4年連続で日本一（人口10万人以上の部）となっている。

国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）共創の場形成支援プログラム（CO-INNEXT・地域共創分野）を推進する目的で、JR鎌倉駅近くに「地域サテライトラボ」を構えて、間もなく1年半がたつ。前述した鎌倉市のリサイクル活動をさらに未来に向けて発展させるため、今研究しているのが、地域で回収された資源を地域内で再生し、新たな公共アイテムを持続的に作り出す方法である。接着剤も釘も原則使わず、大型3Dプリンタを使って一体成型的につくることができる。これまで、地域のコーヒー粕やプラスチックを材料に使った公共ベンチや、遊具などをつくってきた。現在も、地域の方々とワークショップを続けながら、次に何をつくるべきかを検討しているところである。

さて、サテライトラボは、研究開発施設であると同時に、循環型社会を目指す地域のさまざまなプレイヤーたちと出会い、交流するための場所でもある。この1年半で多くの方と知り合ったが、印象的だったのは、どなたもプロジェクトや制作物の命名法がユニークだったことだ。葉山在住の松本信夫さんは、生ごみを「消す」ための家庭用コンポストを開発し、「キエーロ」と名付けている。塾員でもある鎌倉在住の善積真吾さんはリユース食器のスタートアップを立ち上げており、サービスマは「メグルー（Megloo）」である。塾員らによる面白法人カヤックの地域コミュニティ通貨は、鎌倉で「クルッポ」と呼ばれる（鳩の鳴き声から採ったものであるらしい）。こうしたなじみやすい言葉を伴いながら、循環型社会を目指す「ご当地サービス」が次々に生まれてくる鎌倉という地には、実に多くの可能性がある。これまでの取り組みにリスペクトを払いながら、研究の社会実装に向けて、私たちが一歩一歩進んでいきたい。



談話室

教員によるエッセイコーナー